

京ヶ原棚田～未来へ残す天空の棚田～（国府町上地地区）

<概要>

鳥取県と兵庫県の県境にある扇の山の麓、標高600m附近の上地地区に広がる棚田。山深い谷間の急斜面に広がる棚田風景は実に美しいものでした。季節や時間による表情はとても豊かで、最盛期は150枚ほどの田が連なっていました。現在は規模が縮小しましたが、水を供給する京ヶ原（きょうがはら）水路と共に棚田保全の取り組みが続けられています。

●山間部「京ヶ原」を開墾

国府町上地地区は扇ノ山（1,310m）の麓の標高約400m附近の位置にある農村です。昔、米以外に有利な換金作物がなかった山間部の農民にとって、水田を広げたいという願望は人一倍強いものでした。この思いから、この地が開墾されたのは、慶応年間（1865～1867年）のことで、原野約11.2haが新田開発されました。そして京ヶ原の棚田へ用水を補給するため、山間部に位置する上地川の上流部を堰せき止め、約4kmの用水路が開削されました。

●人口減少が進む「上地地区」

かつて、上地地区の住民は、農業と炭焼き、銅鉱山で豊かな生計を立てていました。しかし、鉱山が閉鎖され、さらに燃料革命で炭の需要も激減すると、江戸時代には70戸あった農家が、1955年（昭和30年）頃には35戸になり、2020年（令和3年）には3戸にまで減少してしまいました。

●用水路の維持管理に黄色信号

この地区の農家は、水稻栽培のために年に2度、「京ヶ原用水路」清掃作業が必要です。この水路は素掘りの水路であるため、田植えに先立って、水路の整備や補修が必要となります。しかし、高齢化と人口減少が進むなか、山間部の水路を維持管理するには非常に困難が伴いました。特に、春先の雪解け時には大量の土砂が蓄積しており、用水路の泥上げには3～4日かかります。到底数軒の農家だけでは、用水路の維持に伴う重労働は困難な状況であり、まさに水路の維持管理に黄色信号が灯った訳です。

●棚田応援隊プロジェクト始動

そこで、2002年に農家、国府町、大学、民間が知恵を出し合い、「プロジェクト京ヶ原」を立ち上げて、京ヶ原という条件不利地での農業を存続させようとする組織を始動することになりました。

棚田ボランティア活動は、毎年4月と8月下旬に京ヶ原用水路の水路保全（泥上げと除草作業）を行います。このボランティアは、一般ボランティアと地元企業、大学生などの協力を得て実施されています。鳥取大学では、毎年4月、生存環境学実習（現 環境共生科学実習）という科目の中で、ボランティアに参加いただいています。保全活動後は、地元で採れた山菜の手料理バイキングを食べながら交流を深めています。